

対人場面における好意的感情と外向性の関連性について*

－外向性は「好ましい性格」か？－

Relation between favourable person perception in interpersonal situations and extroversion: Is extroversion a “desirable personality trait”?

水野 邦夫
(MIDZUNO Kunio)

要 約

本研究では、対人場面において他者から好意的な感情を得るとき、代表的な性格特性のひとつである外向性 (extroversion) がどのように寄与するかを、他の性格特性との関連において調べることを目的とした。97名の学生にアンケート調査を行い、各人の友人を1名想起させたうえで、その人物の性格特性の認知やその人物への諸感情などを評定させた。その結果、好意的な感情と最も関連する性格特性は協調性 (agreeableness) であり、外向性はこれらの性格特性要因を統制した場合、好意的感情の生起にほとんど関係しないことが明らかとなり、「外向性は好まれる性格である」とは見かけ上の認知に過ぎないことが示唆された。また、外向性をさまざまな側面から検討したところ、「友好的外向」という成分が協調性や好意的感情と関連を持つことが示され、これが見かけ上の認知を生む原因であることが考察された。

Key Words : 外向性、好意的感情、協調性

はじめに

われわれは、社会的な場面においてさまざまな人々との間で何らかの関係を持つが、その中では他者とできるだけ良好な関係を築き、維持・進展させ

*) 本研究は、日本性格心理学会第12回大会(平成15年9月24日、於 同志社大学)においてパネル発表された。

たいと考えるのが通常であろう。そしてそのような関係を築くためには、他者に対して好意的な感情を持ち、他者にもそのような感情を持たせることが重要であることは言うまでもない。他者との間に好意的な感情が生まれるかどうかには、自分が他者に対してどのような行動をとるか、あるいは他者が自分にどのような行動をとるか（もしくは両者の相互作用）が強く影響するであろうが、その際の行動は、大きく見ると、学習によって獲得された技能的行動と、個人の基本的な行動様式に基づく行動に分けることが可能であろう。前者の行動は社会的スキル（social skill）という観点から捉えることができる。社会的スキルとは、研究者間でその定義が厳密には異なるが、「対人関係を円滑に処理するための行動的スキル」であり、基本的には学習性のものである（すなわち、訓練や経験などを通して習得することができる行動〔群〕）と考えられている。社会的スキルと対人関係との関連を調べた研究をみると、たとえば Jones, Hobbs, & Hockenbury (1982) は、孤独な人ほど社会的スキルに欠けていることを見出している。また、Asher (1983) は、社会的スキルの高い子どもは仲間から人気者と認知されやすいことを指摘している。これらのことから類推すると、社会的スキルの高さは他者に対する好意的な感情と結びつきやすいことが考えられる。

一方、後者はいわゆる性格特性（personality trait）に関するもので、いわゆる「好かれる（好ましい）性格」に基づく行動がこれに当たるであろう。Anderson (1968) は好ましい性格について、アメリカの大学生を対象に調査し、「誠実」「正直」「理解のある」などが上位に挙げたことを報告している。また、松井・江崎・山本 (1983) は大学生やサラリーマン・OLを対象に「魅力ある異性像」を調査したところ、「思いやりがある」「やさしい」「誠実な」など（以上、女性から見た魅力ある男性像）、および「清潔な」「素直な」「健康な」など（同、男性から見た魅力ある女性像）が上位に挙げたという結果を得ている。

ところで、代表的な性格特性のひとつである「外向性（Extroversion）」は、好意的感情を生みやすいと一般に考えられているようである。外向性とは「広

い範囲の人と交際し、流暢な弁舌と巧みな機知をもって明るく談笑することを好む（詫摩（1981），p.827）」性格特性であり、一般的には「明るい性格」と呼ばれているもののことである。外向的な性格特性が好意的に捉えられることは、先の松井ら（1983）で男女とも「明朗な」人物が魅力ある異性像の上位に挙がっている（男性像は第5位、女性像は第1位）ことからわかる。また、就職情報研究会（2001）は某出版社が360社の民間企業に対して行ったアンケート調査の一部を紹介しているが、それによると、「面接官が見るチェックポイント」のベスト1に「明るく元気に話せているか」が挙げられており、このことも外向性が好まれやすい性格とみなされていることを示すものといえよう。さらに、外向性は先に述べた社会的スキルと高い関連性を持つことも指摘されている（菊池，1988；菊池・堀毛，1994；水野，1997）。このように、外向性が好まれる性格特性であるとみなされることは十分に理解できるが、上記の研究成果等を待つまでもなく、外向性が好まれる性格である（そしてその対極にある内向性が否定的に受け止められやすい）ことは、われわれの日常生活においてよく思い当たることでもあろう。

しかし、外向性が必ずしも好まれる性格といえるかどうかについては、それを疑問視する研究もいくつか見られる。まず中村（1984）は、内向的な人物は、同じ内向的な人物からではあるが、外向的な人物よりも「信頼できる」などと認知されやすいことを報告している。また水野（1995）は、外向的な人物はともに活動するグループのメンバーから「信用できる」人物と見なされにくいことを報告している。これらの結果は、外向性にも否定的なイメージを持つ面があることを示唆しているといえよう。さらに水野（1998）は、知り合って2週間程度の好感が持てる（人あたりのよい）人物への好感度に外向性がほとんど影響していないことを見出している。また、水野（1999）は人物への好悪感情と外向性－内向性との間には関連が少ないことを示しており、水野（2001）は人物への好悪感情の変化にも外向性－内向性が関係しないことを見出している。このほかにも、水野（1996，1997，2003）は、社会的スキルの要因を統制することで、外向性が良好な関係性にほとんど影響

しないことを明らかにしている。

このようにみると、外向性が好まれる性格特性であるという認知は必ずしも適切ではないといえるかもしれない。ここで、先の水野（2003）は、分析結果をもとに、好まれる性格特性とはむしろ「協調性（agreeableness）」ではないかと示唆している。たしかに協調的な性格特性は先の松井ら（1983）においても上位に挙げられており、われわれの一般的な常識に照らしても納得できるところであろう。このように考えると、外向性が好まれる性格特性と認知されてしまう背景には、協調性をはじめとした他の性格特性が介在しているという可能性もあろう。そこで本研究では、相手の認知されたパーソナリティとその人物に対して持つさまざまな感情との関連、とりわけ外向性と好意的感情の関係性を中心に調べ、外向性や他の代表的な性格特性が好意的感情とどのように関連するのかについて検討することを目的とした。次に、外向性がなぜ好まれる性格特性として認知されてしまうのかについて、外向性をいくつかの構成要素に分類し、それぞれと他の性格特性や好意的感情との関連を調べることで検討を行った。

方 法

被調査者 某四年制大学及び看護系専門学校に通学する1回生に下記質問紙への回答を依頼したところ、97名（男子42名、女子55名）がそれに応じた。

質問紙 調査にあたり、「人間関係についての調査」と題した質問紙を作成した。質問紙は、性別を回答する欄につづいて、「あなたの友人（大学、バイト先、クラブ、高校時代…と、どこの友人でもかまいません）を1名思い浮かべてください。」という教示文を掲載したあとに、以下の群からなる項目について、その人物がどれくらいあてはまるか、もしくはその人物に対してどれくらいそう思っているかを5段階で回答できるように構成されている。

1) **主要5因子性格検査の各項目** これは、村上・村上（1996）が「性格の5因子説（Big Five）」に基づいて作成したもので、外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性（ただし、本研究では「洗練性」と称する）の5つ

の性格特性を測定する。各特性に関する問は12項目ずつあり、さらに、建前尺度(自身をよく見せようと回答しているケースを検出するための項目群)10項目を加えた計70項目からなる。ただし、本研究では建前尺度項目を除外した60項目について回答を求めた。また、この検査の本来の使用目的とは異なり、思い浮かべた人物について評定させるため、内容が混乱を招いたり、回答しづらくなると思われる項目については、若干の変更を行った(たとえば、「私は重要人物です」という問は、そのまま掲載すると、「私」が誰を指すのか混乱する恐れがあるため、その部分を除外し、「重要人物です」というように変更した)。

2) 対人感情に関する項目 齊藤(1980)はMcDougall(1908)やFreedman, Leary, Ossorio, & Coffey(1951)などに基づいて、対人感情の諸傾向(劣等、尊敬、愛情、慈愛、優越、軽蔑、憎悪、恐怖)が円環状に配列しうるとしたモデルを提唱している。そこで、筆者がこれらの対人感情傾向を表現すると思われる項目をそれぞれについて2つずつ考え、計16項目を作成した。なお、質問紙ではa)被調査者がその人物に対してどれくらいそう思っているかを回答する欄とb)その人物が被調査者に対してどれくらいそう思っているかを予測して回答する欄を設けた。

その他、思い浮かべた人物の性別を尋ねる問、アンケートに関する自由回答欄も設けた。

手 続 き 授業時間の一部を利用して、被調査者に上記質問紙を配付し、その場で回答するように求めた。回答に要した時間は、15分程度であった。

結 果

研究目的の主旨から、主要5因子性格検査に関する項目、および対人感情に関する項目のうち被調査者がその人物に対してどれくらいそう思っているかを回答する問を分析対象とした。また、記入洩れのあるデータについては、各分析の都度に除外した。

主要5因子性格検査の因子分析 主要5因子性格検査の各項目について、思

表1 主要5因子性格検査項目の因子負荷量行列

項目番号	村上・村上 (1996) における分類	N	E	C	O	A	h^2
53	N	.834	.006	-.021	.058	.030	.707
48	N	.803	-.152	-.009	-.077	.083	.741
27	N	.773	.223	.085	.113	-.165	.581
22	N	.754	-.141	.045	-.081	.131	.656
12	N	.750	-.065	-.112	.018	.234	.694
17	N	.730	.067	-.203	-.265	-.184	.618
8	N	.730	-.054	.051	.024	.138	.570
24	N	.699	-.081	-.003	.174	.014	.564
38	N	.591	.080	.354	-.195	-.014	.487
20	O	.551	.078	.052	-.367	-.243	.470
57	N	.398	-.153	.326	.022	-.255	.391
37	O	-.261	.084	-.255	.117	.191	.224
15	N	-.599	.139	.080	.002	.002	.440
16	N	-.665	.056	-.107	-.242	.178	.552
18	E	.077	.858	-.080	-.025	.017	.706
45	E	.138	.813	-.002	.169	.027	.665
10	E	-.023	.806	-.060	-.176	-.058	.660
3	E	.159	.765	.000	-.099	-.088	.535
49	E	-.046	.568	.024	-.019	.258	.460
35	E	-.182	.500	-.110	-.090	.322	.506
43	A	-.037	-.431	.390	.170	.212	.270
21	E	.225	-.559	-.267	-.093	-.088	.552
34	E	.237	-.569	.017	-.219	.319	.533
4	E	.188	-.600	.123	.039	.037	.441
32	E	.179	-.683	-.264	-.041	-.074	.689
51	E	.045	-.686	.118	.137	-.181	.579
13	E	.080	-.729	-.126	-.178	-.121	.669
26	C	.264	.181	.837	.140	-.042	.733
55	C	.050	-.001	.797	-.086	-.002	.675
25	C	.019	.111	.794	.168	-.121	.659
2	C	-.069	-.085	.771	.079	-.049	.592
33	C	.143	.128	.678	-.162	-.027	.574
39	A	.027	-.119	.579	.108	-.243	.439
1	C	-.144	.222	.339	-.309	.138	.388
11	C	.050	-.133	-.402	.182	.174	.325
31	O	-.023	.125	-.410	.243	.082	.314
56	A	.217	.069	-.448	.188	.280	.485
19	C	.014	.326	-.513	.142	-.231	.374
52	O	.047	-.052	.030	.796	.087	.637
40	O	-.083	-.004	.198	.751	.051	.527
28	O	.095	-.100	.110	.722	.080	.514
36	O	.092	.142	-.117	.651	.007	.509
46	O	-.284	-.088	-.042	.599	.046	.436
7	O	.120	.108	.111	.574	.006	.333
44	C	.060	-.108	-.329	.559	-.302	.605
50	O	-.150	-.008	-.312	.549	-.198	.510
47	C	.003	-.023	-.146	.514	.064	.337
9	C	-.054	.045	.394	-.410	-.070	.442
41	O	.066	-.292	-.018	-.631	.075	.493
30	O	.030	.166	.055	-.688	-.078	.523
5	A	.134	-.070	-.319	-.066	.569	.520
60	A	.220	.151	.058	.110	.556	.402
59	A	.252	.088	-.192	.205	.536	.528
23	A	.163	.152	-.367	.069	.509	.562
42	A	.062	.261	-.314	.079	.492	.528
14	A	.166	.085	-.346	-.014	.338	.325
54	A	.299	-.030	.145	.094	-.331	.237
58	C	.119	-.107	-.362	.172	-.377	.340
29	A	.254	.131	.042	.099	-.598	.405
6	A	.239	.052	-.082	-.075	-.625	.417
寄与		7.410	6.844	6.448	5.971	3.978	
因子間相関							
	N						
	E	-.264					
	C	-.102	.095				
	O	.035	.019	-.274			
	A	.021	.185	-.205	.023		

註1：N = 情緒安定性、E = 外向性、C = 勤勉性、O = 洗練性、A = 協調性、をそれぞれ表す。

註2：絶対値が.50よりも上回る負荷量は太字で示した。

い浮かべた人物がどれくらいあてはまるかという回答データについて、因子分析を行った。なお、この検査が性格の5因子説に基づいて作成されていることを考慮して、因子数は5因子指定とし、また、主成分解、Promax回転を採用した。その因子パターン（因子負荷量行列）を表1に示す。表1を見ると、因子パターンは村上・村上（1996）のそれとよく類似している（ただし、因子の順序は異なっている）のがわかる。このことから、思い浮かべた人物も、だいたい5つの性格的側面（情緒安定性、外向性、勤勉性、洗練性、協調性）から認知されていると考えられる。

対人感情項目の因子分析 対人感情項目のデータについても、同様に因子分析を行った。なお、モデルでは「支配-服従」および「愛情-憎悪」の2次元を基軸としたものであったため、2因子解を求めたが、モデルどおりの布置は見出されなかった。そこで、解釈可能性の高いと思われる因子数を探索的に求め、5因子解が最も適切であると判断した。なお、他は先と同様に主成分解、Promax回転を採用した。その因子パターンを表2に示す。各因子の解釈については、因子負荷量から、第1因子より順に、「好意」、「軽蔑」、「劣等」、「恐怖」、「慈愛」と解釈した。

性格特性と対人感情との関連について 思い浮かべた人物の認知された性格特性とその人物へ抱く感情との関連を調べるために、各の因子得点を用いて、両者の相関を求めた。なお、各性格特性と対人感情との相関を算出する際には、他の4つの性格特性を統制変数とした偏相関を算出した。その結果を表3に示す。表3から、対人感情との間に有意な相関がみられた性格特性は、協調性と洗練性であり、とりわけ協調性は3つの対人感情の間に有意な相関がみられ、とくに好意との相関は他の性格特性よりも断然高いのが分かる。他の4つの特性を統制してもなおかつ高い相関が得られたことから、相手に対して好意的な感情を抱く際には、その人物がともかくは協調的な性格であると認知されていることが考えられよう。また、外向性をはじめ、他の性格特性は、協調性の影響がなければ、好意的感情と結びつきにくいといえるであろう。

表2 対人感情に関する項目の因子負荷量行列

質問項目	好意	軽蔑	劣等	恐怖	慈愛	h^2
その人のことを素晴らしい人だと思っている	.825	.134	.141	.115	-.014	.702
その人には親しみを感じている	.816	-.146	-.126	-.005	.044	.673
その人のことをいい人だと思っている	.768	-.121	-.165	.045	.038	.545
その人には強気に出ても大丈夫だと思っている	.196	.763	.192	-.098	.133	.577
その人のことをバカにしているところがある	-.196	.693	-.116	.119	.097	.698
その人のことを軽く考えてしまう	-.424	.595	-.021	-.216	-.067	.585
その人に対してむかつくことがある	-.110	.440	-.218	.388	-.254	.725
その人には引け目(自分の方が劣っていると)感じてしまう	-.236	-.068	.798	.143	.209	.578
その人には頭が上がらない	.068	-.011	.734	.050	-.057	.576
その人のことを頼もしく思っている	.412	.412	.568	-.050	-.155	.734
その人のことを恐れている	.202	.070	.041	.848	.098	.635
その人の前では緊張してしまうところがある	-.031	-.378	.245	.767	-.004	.646
その人のことをいやだと思ふ時がある	-.226	.146	-.162	.422	-.316	.602
自分はその人の気持ちをよく受け入れている方だと思う	.204	.009	-.108	-.028	.774	.666
自分はその人のよきお兄さん・お姉さんの存在だと思っている	-.216	.163	.466	.049	.559	.456
その人よりも自分の方が勝っていると思っている	-.060	.383	-.399	.132	.511	.687
寄 与	2.643	2.206	2.106	1.685	1.444	
因子間相関	好意	軽蔑	劣等	恐怖		
	軽蔑	-.196				
	劣等	.386	-.206			
	恐怖	-.359	.189	-.217		
	慈愛	.051	-.079	-.038	-.159	

註：絶対値が.50よりも上回る負荷量は太字で示した。

表3 対人感情と性格特性の偏相関

	情緒安定性	外向性	勤勉性	洗練性	協調性
好意	-.116	.144	-.195	.143	.513***
	<i>-.081</i>	<i>.218*</i>	<i>-.272**</i>	<i>.166</i>	<i>.547***</i>
軽蔑	.078	-.080	.143	-.063	-.020
	<i>.079</i>	<i>-.092</i>	<i>.155</i>	<i>-.103</i>	<i>-.062</i>
劣等	.093	-.047	-.093	.314**	.273**
	<i>.133</i>	<i>-.027</i>	<i>-.237*</i>	<i>.336***</i>	<i>.279**</i>
恐怖	.110	-.187	.136	-.177	-.279**
	<i>.115</i>	<i>-.243*</i>	<i>.197*</i>	<i>-.202*</i>	<i>-.325**</i>
慈愛	.009	.045	.123	-.052	.054
	<i>-.018</i>	<i>.068</i>	<i>.138</i>	<i>-.087</i>	<i>.039</i>

註1：+ $p < .10$ 、* $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$ 、 $N = 95$

註2：下段斜体数字はピアソンの相関係数を表す。

註3：情緒安定性が高いほど情緒不安定、勤勉性が高いほど勤勉でないことをそれぞれ表す。

外向性の諸側面について 本研究では、外向性と好意的感情との関連性に焦点を当てているが、先にみたように、両者の関連性は低いという結果が得られた。そこで次に、外向性をいくつかの側面に分解し、各側面が好意的感情や他の性格特性とどのように関連するかについて調べる。

主要5因子性格検査の外向性に関する項目は1因子性のものであると考えられる(ちなみに、これらの項目データに対して主成分分析を行った際の第1主成分の分散説明率は52.5%であった)。しかし、外向性の諸側面と好意的感情の関連を調べるために、敢えて因子分析を行った。なお、解釈可能性を考慮した結果、3因子解を採用した(他は先の分析と同様に、主成分解、Promax回転とした)。その因子パターンを表4に示す。各因子の解釈については、因子負荷量から、第1因子より順に、快活的外向、友好的外向、主張的外向と解釈した。

表4 外向性項目の因子パターン

質問項目	快活的外向	友好的外向	主張的外向	h^2
他の人と比べると話し好きです。	.995	-.130	.150	.771
元気がよいと人に言われます。	.715	-.016	-.045	.532
どちらかというにぎやかな性格です。	.672	.020	-.229	.668
他の人と比べると活発に行動するほうです。	.594	.211	-.116	.626
積極的に人と付き合うほうです。	.550	.393	-.033	.711
人前で話すのは苦手です。	-.423	-.306	.254	.639
他の人と同じように、すぐに友達ができるほうです。	.044	.988	.257	.857
どちらかというに引っ込み思案です。	-.243	-.354	.315	.542
どちらかというに無口です。	-.400	-.418	.074	.569
どちらかというに地味でめだたないほうです。	.252	-.658	.494	.733
あまり自分の意見を主張しないほうです。	-.038	.203	.992	.880
どちらかというに、おとなしい性格です。	-.280	-.254	.506	.717
寄 与	3.576	2.501	2.168	
因子間相関	快活的外向	友好的外向		
	友好的外向	.519		
	主張的外向	-.472	-.436	

註：絶対値が.50よりも上回る負荷量は太字で示した。

外向性の3側面と対人感情について 次に、外向性の3側面(快活的外向・友好的外向・主張的外向)と対人感情との関連を調べるために、それぞれの

因子得点を用いて、両者の相関係数（ピアソンの積率相関係数）を求めた。その結果、特に好意的感情と有意な相関が認められたのは友好的外向のみであった（表5参照）。

表5 外向性の3側面と対人感情との相関

		快活的外向	友好的外向	主張的外向
好	意	.150	.316**	-.050
軽	蔑	.008	-.140	.112
劣	等	-.079	.071	.151
恐	怖	-.126	-.328***	.050
慈	愛	.102	-.071	-.007

註1：** $p < .01$ 、*** $p < .001$ 、 $N = 97$

註2：主張的外向が高いほど非主張的であることを表す。

外向性の3側面と他の性格特性について つづいて、外向性の3側面と他の4つの性格特性との相関係数（ピアソンの積率相関係数）を求めた。その結果、特に協調性との間に有意な相関がみられたのは快活的外向と友好的外向であり、主張的外向のみが有意ではなかった（表6参照）。

表6 外向性の3側面と他の性格特性との相関

		快活的外向	友好的外向	主張的外向	
情	緒	性	-.150	-.337***	.434***
勤	勉	性	.104	-.013	-.181
洗	練	性	-.022	-.027	-.149
協	調	性	.229*	.396***	.116

註1：* $p < .05$ 、*** $p < .001$ 、 $N = 96$

註2：情緒性が高いほど情緒不安定、主張性が高いほど非主張的であることをそれぞれ表す。

考 察

本研究では外向性という性格特性に焦点を当て、まずはじめに、外向性が対人関係における好意的感情とどのような関連性を持つかについて調べたが、結果から明らかなように、他の性格特性を統制した場合（すなわち、外向性以外の4特性が一定であるとした場合）、外向性と好意的感情の間に関連性がほとんどみられなかった。このことは、外向性それ自体は好意的感情と関係するものではないことを表しており、「外向性は好まれる性格」という認知は、他の性格特性、とりわけ協調性が介在することによって生じる見かけ

上の認知であるということがいえるであろう。

そこで次に、外向性が協調性などの性格特性とどのように関連し、それが好意的感情とどのように関連するのかについて調べるために、外向性がどのような側面から構成されているかを明らかにし、各側面が好意的感情や協調性などどのような関連性を持つかを検討した。その結果、外向性項目を因子分析して得られた3つの側面（快活的外向、友好的外向、主張的外向）のうち、好意的感情と相関が高かったのは、友好的外向のみであり、また、その友好的外向は協調性との相関が高かった。表1に示されているように、外向性と協調性の相関係数値は.185と決して高くはないが、外向性のある側面、すなわち友好的外向は協調性や好意的感情と関連を持つため、「外向性は好まれる性格」という認知が成立しやすいのではないかと考えられる（ちなみに、協調性を統制変数とした友好的外向と好意的感情の偏相関係数は.138 (*ns*)、逆に友好的外向を統制変数とした協調性と好意的感情の偏相関係数は.485 ($p < .0001$)であった)。しかし、この「友好的外向」は因子分析の結果（表4参照）だけからは、どのような特性であるのかを詳細に読み取るのは困難である。今後は友好的外向の意味を明らかにしていく必要があるだろう。

ところで、協調性と主張的外向の間には有意な相関関係は見出されなかったが、係数値の符号から考えると、主張的外向が強いほど、協調性が低いとみることができる。堀毛（1994）や Takai & Ota（1994）などは、日本人は対人的な場面において積極的な自己表現を行うことが好まれないことを示唆しているが、今回の結果もそれに合致するところがあるといえよう。

引用文献

- Anderson, N. H. 1968 Likableness ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, **9**, 272-279.
- Asher, S. R. 1983 Social competence and peer status: recent advances and future directions. *Child Development*, **54**, 1427-1434.
- Freedman, M. B., Leary, T. F., Ossorio, A. G., & Coffey, H. S. 1951 The

- interpersonal dimension of personality. *Journal of Personality*, **20**, 143-161.
- 堀毛一也 1994 人当たりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの社会心理学 川島書店, Pp.168-176.
- Jones, W. H., Hobbs, A. S., & Hockenbury, D. 1982 Lonliness and social skill deficits. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 682-689.
- 菊池章夫・堀毛一也 1994 社会的スキルとは 菊池章夫・堀毛一也（編著） 社会的スキルの心理学 川島書店, Pp.2-22.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 松井 豊・江崎 修・山本真理子 1983 魅力を感じる異性像—同性の推測と実際とのズレ— 日本社会心理学会第24回大会発表論文集, 44-45.
- McDougall, W. 1908 *An introduction to social psychology*. Methuen.
- 水野邦夫 1995 外向者は対人関係を柔軟に処理できるか 同志社心理, **42**, 23-31.
- 水野邦夫 1996 良好な対人関係に及ぼす社会的スキル及び性格特性の効果 同志社心理, **43**, 36-42.
- 水野邦夫 1997 対人関係における外向性の直接的効果について 聖泉論叢, **5**, 63-75.
- 水野邦夫 1998 関係初期の好感度に及ぼす行動特性・社会的スキルの効果 日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 220-221.
- 水野邦夫 1999 対人的好悪感情と対人認知の関連について 聖泉論叢, **7**, 55-68.
- 水野邦夫 2001 対人的好悪感情の変化に伴うパーソナリティおよび社会的スキル認知の変化について 行動科学, **40**, 9-18.
- 水野邦夫 2003 社会的スキルに影響する特性要因についての検討—外向性は社会的スキルの主要因か?— 行動科学, **42**, 99-102.
- 村上宣寛・村上千恵子 1997 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, **6**, 29-39.
- 中村雅彦 1984 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果 実験社会心理学研

究, 23, 139-145.

斎藤 勇 1980 対人関係理解のための感情傾向分類の一試み 立正大学教養部紀要, 14, 1-14.

就職情報研究会(編) 2001 2003年度版就職活動始めるブック 実務教育出版

Takai, J., & Ota H. 1994 Assessing Japanese interpersonal communication competence. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.

詫摩武俊 1981 類型論 藤永保(編集代表) 新版心理学事典 平凡社 Pp.827-828.